

三十 元氣を引き出す心がけ — 孫たちへ

二月におばあさんとおじいさんは、となりの市へ映画を観に行きました。新聞といっしょにチラシが入っていて、こちらとあちらの二つの市の新聞販売店が愛読者を無料で映画に招待する、と書いてありました。去年の秋に公開された映画で、外国の映画祭でなにかの賞をもらった作品です。よい機会だと思い応募したのです。

映画のタイトルは「ふしぎな岬の物語」。舞台は大都市の近くの港町、その岬にぽつんとある喫茶店が人々をつないで織りなす物語を、ほのぼのと幻想的な映像に表現します。密接な出来事が劇的にくりひろげられるではありませんが、人が出会うだろう心の風景を画面はたしかに映し出し、よい映画が与えてくれるあの心もちを感じることができました。主演の俳優は吉永小百合さん。この映画を観たあと調べてみたらおじいさんと同じ年の同じ月の生まれです。清純な女優として活躍していた若いころには、「サユリスト」と呼ばれるおおぜいのファンがいたけれど、付和雷同することのきらいなおじいさんはその作品をあまり見ていません。でも、自分が歳をとったと自覚するようになって、この人がすてきに歳を重ねていることに気づき、その姿を写したカレンダーをもらったりと喜

んで壁に掛けたものです。こんどの映画では、ますますおちついて品性を高めた女優を見ることになりました。終幕にひと波乱あったあとで海風が吹くなかに立っている主人公は、かすかに風に揺られているように見えました。しかし、小柄なその女性はいさやかな強さを秘めて、死すべき定めにある人間に望みをかける勇気を示していました。

映画を観るのにとりまの市まで行ったのは、この市に映画館がないからです。おじいさんが高校生のころまで市内に四つぐらい映画館がありました。近くの一つは、映画好きの人たちが少額のお金を出し合って設立したもので、配当として何枚かの入館券がもらえました。わが家にもあったその券で、今から思えばあまり上出来とは言えない娯楽作品を観に行ったものです。大学入試をひかえた一月に、ニュースが高校入試のための塾かなにかを映し出すのを見て、都会では中学生までこんなに受験勉強をしていると感心したことを思い出します。いなかでは、演劇や音楽を鑑賞する機会はなかったもので、映画館は芸術的なものに触れる場を提供してくれる貴重な存在でした。もつとも、同級生のなかにはステレオ装置で音楽を聴く者もいたので、わが家が遅れていたと言えます。大学生になつてから、自分が文化的な面でめぐまれた環境に育たなかったのだと知りました。

考えてみれば、芸術は都市的なものだと思います。「衣食足りて礼節を知る」というの

が社会の現実ですから、少しゆとりがあつてはじめて芸術のようなものを楽しめるのです。そして、都会には豊かな人々が多くいて、芸術に触れる場や機会が多いのです。芸術は、それに親しむことによって鑑賞する力がついてくるもので、どうしても都市で洗練されることになります。いなかにも趣味のよい人はいたはずですが、たいていは都会から波のように打ち寄せる影響を受け入れる程度だったでしょう。こういうしだいで、芸術などと高尚なことを言わなくても、おじいさんは趣味力のない少年だったのです。大学生以後都会に住むようになってから、絵画などの展覧会を観ることが始まり、わずかながら舞台を観たり音楽を聴いたりすることもありました。それでも、おじいさんの眼も耳も鑑賞する力が足りません。最近、高音が聞こえていないと医者に言われたほどです。

都会に住む君たちは、おじいさんよりもよい環境に暮らしています。心がけて絵や彫刻の展覧会に行き、舞台や映画を観る機会があれば出かけ、音楽にも興味をもつてほしいと願っています。読書のこととはまたの機会に語りましょう。とにかく、若いうちはいろいろなことに興味をもてるはずだから、芸術に関心を広げて、趣味すなわち美的感覚をみがいて下さい。趣味は、偉大な哲学者が一冊の書物を書くほど人間にとって重要なことから、人のスタイルを決めることにもなるのです。本物の粋な人になってください。

映画で始めた話が芸術全般に広がってしまいました。おじいさんの言いたかったのは、そういう文化施設のある環境が生活を豊かにするということです。二月に行った映画館は古びて経営も困難だと思われませんが、それがなんとか映画を観る機会を提供しているのです。それを支援するためには、映画製作会社が人を観る気にさせるよい映画を作る必要があると思います。こちらの市には、文楽を上演できる劇場があります。君たちには、人形劇を楽しむ老人が奇妙に見えるかな。市と県が財政赤字を増やしてまで建てた劇場を無駄にしないために、映画も上映するなどいろいろな企画をしてほしいものです。とにかく、いなかで人が元気になる工夫をもっと試みる必要があるのです。

今、都会でも映画館が減って、文化的な状況がおじいさんの若かったころと違ってきたことを教えられます。映画館は減ったのに、大きな宣伝費をかけた商業的な映画をたいへんな数の人たちが観に行きます。映画以外の催し物でも、同じようなことが起きています。テレビや新聞・雑誌などの大がかりな宣伝に影響されやすくなっているのです。そういうとき、よい趣味をもっていることが大切です。たとえば映画でも、気をつけて探せば宣伝されない作品にもよい映画が見つかるでしょう。それぞれの芸術にはそれぞれの楽しみ方があります。君たちにはそういう洗練された趣味をもってほしいと思います。

美術館や博物館など文化的な環境が整っていることが、生活を豊かにする条件の一つで

すが、われわれの方でも準備している必要があります。最近「元気をあげる、もらう」という言葉が使われすぎですが、元気は、単に健康で勢いがよいことを意味するものではありません。「気」は中国の言葉で、天地に充滿する万物生成の根本となる精気のことです。現実には観察できることを超えていて、精神主義のきらいもあります。それでも、元気をその人のなかに湧いてくる気力と考えれば、何かに触発されて、立ち向かわなければならぬ大事なことに積極的に取り組むことはよいことでしょう。大切なのは、そういうきっかけを与えてくれるものにいつも関心をもち、心がけて触れようとすることです。

芸術がその重要な部分になう文化というのは、環境と人がつくり出していくものです。社会がどういう文化をつくっているかは、その社会に暮らす者にとっては重大なことです。一人ひとりの力は小さくても、いつも文化をつくるという意識をどこかに抱いていることが大事だと思います。家族も子供にとつてはそういう大事な環境です。おおげさですが、家族にも一つの文化があると思うべきなのです。おじいさんは、君たちに冗談めかして「良家の息子や娘ともあろう者が」と注意するときやほかの話をするとき、そういうことも心がけているつもりです。内心では、短気な性分が君たちに影響を与えるだろうと恐れています。そう、文化は、そこに暮らす人間の考え方と行動に大きな影響を与

えるのです。社会で使われている言葉からして、生まれて以来君たちをとらえて離さない。日本語の言葉としくみは君たちの言動に作用します。だから、芸術から触発を受けるように心がけているだけでなく、他方では、知らないうちに文化に強制されることを恐れなくてはいけません。文化のような環境にうまく接するのは、なかなかむつかしいのです。結局、元気が湧き出るように心がけるときも、心の奥で、よく気をつけて考えていることが大切なのです。

二〇一五年、鷹いましわざを習う候

二十四節氣をさらに三つに分けた七十二候に「鷹乃学習」という言葉があることを、カレンダーで知りました。幼いタカが飛ぶことを覚える候という意味だそうです。生まれつき飛ぶことのできる鷹や隼が学ぶのは羽ばたくこと。